20201018レムナント教会1部

**赦しの他には(Ⅱサムエル記14:12-17)**

　愛が先なのか、法が先なのかと聞かれると、ほとんどの人は「愛でしょう」と返事をします。しかし、実際、現実にぶつかったときには、法を先に走らせるというのが人間というものではないでしょうか。私たちクリスチャンは、このことに対して明確な答えを得て、また、実際それを適用していく勝利の信者にならなければいけないと思います。アブシャロムがアムノンを殺した後、遠くに逃げて3年くらい時間が経ちました。その間、ダビデはアブシャロムのことを気にかけて、ものすごく苦しい思いをしていたようです。それが部下の目にも見えるくらいでした。たぶんダビデの心境は、親としての心境はもちろんでしょうけれども、一人の息子はもうすでに死んだので、ある意味、自分の管轄ではありません。今生き残っているアブシャロムは、人間的な意味もそうでしょうけれども、霊的な意味をもってアブシャロムに対する切ない思いがあったと思われます。

　そのときに部下の一人ヨアブという人が、王様がこのような状態でずっといるということは王様にとっても国にとっても良くないと思って、一芝居を打ってもらうことにしました。ある女性を呼んで「私の指示通りに王様に訴えなさい」と言って、その女性がダビデの前に行き、自分のいろいろな事情を訴えることになります。「私に二人の息子がいましたが、兄弟げんかをする内、一人がもう一人を殺してしまいました。それは大変なことです。その結果、周辺の人々が、自分の兄弟を殺した者をこのまま放っておくわけにはいかない。法に基づいて、その人も殺さないといけないと騒いでいます。法にのっとって考えるとそうなるのが当然だと思いますが、そうすると私たちの家系の代がそこで終わってしまいます。そうするわけにはいかないので、私はそれを許すことはできません。王様、これをどうしたらいいでしょうか」。それを聞いたときにダビデ王は「誰がそういうことをするのか。これからあなたの息子に対して誰も手を出すことができないようにしよう」とその女性の訴えに対して反応を示しました。そのとき女性がダビデに「このはしために、一言、王さまに申し上げさせてください。私の息子に対して、主の名によってそのようにおっしゃいましたけれども、なぜあなたはそのようにしないのでしょうか」と訴えました。14章の11節を見ますと、「どうか王さま。あなたの神、主に心を留め、血の復讐をする者が殺すことをくり返さず」と書いてあります。そうならないようにと神、主に心を留めてと言っていたわけです。それから、11節の最後の部分も「主は生きておられる」と神様のことを取り上げてダビデに訴えていたわけです。それから、13節でその女の人は「あなたはどうして、このような神の民に逆らうようなことを、計られたのですか。王は、先のようなことを語られて、ご自分を罪ある者とされています。王は追放された者を戻しておられません」と言います。今あなたの私に対しての配慮、神の名前によっておっしゃったことに基づきますと、あなたは罪を犯すようなことですよという話なのです。それから14節を見ても「私たちは、必ず死ぬ者です。私たちは地面にこぼれて、もう集めることのできない水のようなものです。神は死んだ者をよみがえらせてはくださいません。どうか追放されている者を追放されたままにしておかないように、ご計画をお立てください」とあります。神様の慈愛、神様の不思議な愛に訴えているようなことなのです。そこでダビデは「これがあなたの思いなのか正直に言いなさい。ヨアブがあなたに指示したことでしょう」と問い詰めると、その女性は「おっしゃるとおりです。ヨアブという人に言われたままに王様に話しました」と話します。そこでダビデが「なるほど、そういうことなのか」と思って、女の人を帰し、アブシャロムを戻すことにしたということが今日の聖書の箇所です。罪を犯して犯罪を犯すようになりました。あるいは大きなミスを犯したり、失敗を犯したことを通して、実は赦しの神様を学んでいくということです。今日の聖書の箇所を通して、神様が私たちにおっしゃりたいことは、このようなメッセージです。

　第一に、人間が罪人だということが正しく理解できたときに、赦し以外にはどこにも道がないということが分かるようになります。人間が罪人だということは、悪いことをした、あるいはその行いということ以前のお話です。もし悪いことをしたことが罪人であれば、そうでないものはまだまだ罪人ではないでしょう。ここで今、「人間が罪人であることが分かったとき」と言うときの「罪人」というのは、より根本的なことを指して申し上げていることです。つまり、原罪という罪ですが、人間が本当にどうしようもない罪人なのだということが正しく理解できたときには、いろいろな法則があり、いろいろな文句があるかもしれませんが何も通用しません。赦し以外には道がありません。人間がどれほど根本的に不可能な罪人なのかということは、聖書の旧約すべての内容がそれを証明しています。旧約の内容すべては、人間がどうしようもない根っこから腐っている、取り返しのつかない罪人なのだという証拠だらけです。そして、イエス様がこの地上に来られたときに、それを一言でこのようにまとめられました。ヨハネ8：44「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者」であると。人間はこのような罪人なのです。そして、それを自ら体験して現場を通して確認していたパウロは、エペソ2：1-3で人間が罪人だということをこのように述べています。「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって」「空中の権威を持つ支配者」、悪魔、サタンに従い、世の流れに流されている者であり、生まれながら神の御怒りを受けるしかない者だったのだよと述べています。それを今日、一芝居打っていた女性の言葉の中からも見られます。先ほども読みましたが、14節「私たちは、必ず死ぬ者です。私たちは地面にこぼれて、もう集めることのできない水のようなものです」。つまり、人間がこのような罪人だというのはどういう意味なのかというと、人間自らはこの罪の問題を絶対に解決することが不可能な罪を抱えている者だという意味なのです。言葉を替えますと、人間自ら善を行うということはありえません。人間には善というものが一ミリたりとも存在しません。これが人間が罪人という意味です。当たり前なことに人間は自ら神様の法律、律法を守ることは不可能なのです。神の律法は正しいもので、神の律法は立派なものです。しかし、人間が罪人であるがゆえに、その律法を一ミリたりとも守ることができない存在なのです。ですから、この世に存在するどのようなすごいもの、正しいもの、立派なものがあっても、根本的に人間に役に立たないものなのです。人を根本から変えることができないし、幸せにすることはできない、それが人間は罪人だという意味なのです。

　ですから、良いか悪いか、どのようなルールなのか、法則なのかなどと一切関係なく、そのすべてを超越して、それに一切当たらないで赦すことだけが人間が生きる道になります。法律もあります。人間の良心というのもあります。是々非々の様々な判断も法則あります。しかし、そのすべてを無視して、そのすべてを超えて、赦すこと以外には生きる道はありません。イエス様はそのことをマタイ18：21-22において、このように説明していらっしゃいます。ペテロは聞きました。「人が私に罪を犯したときに、何回ぐらい赦せばいいでしょうか。7回ぐらいでいいでしょうか」。自分で精一杯考えたのが7回でしょう。そこでイエス様は言います。7×70回。計算すれば490回。491回目は赦されなくてもいいのかという意味ではありません。7という数字はイスラエルの人にとって意味ある数字なのです。無限なのです。赦すこと以外には答えがないし、道がない、何回でも赦すこと以外には人間に答えは、希望はありませんということをおっしゃいました。そのあと、マタイ18：23-35まで、一万タラントの借金をチャラにされていた者が、一タラントの借金をしている者の首を絞めるようなたとえ話がその次に出ています。一芝居打っていた女の人、そして、ダビデとの会話を通して、神様がダビデに、今の私たちにおっしゃりたいことは、人間は罪人なので最初から一ミリたりとも希望のない存在で、正しいかどうかはあるけれども、正しく行うことができないし、正しいことを守る能力が一ミリもない存在なので、赦すこと以外には人間が助かる道、人間が生きる道はないし、希望は赦し以外にはどこにもないということです。宇宙のどこに行ってもこのような答えは見ることができません。聖書のほかにはありません。なぜかと言いますと、この唯一生きることができる希望になる赦しという道は、キリスト・イエスの中から見られる、そして、神様の方にしかないものなのです。キリスト・イエスを通して見ることができる神様にのみあるもの、これこそが人間の唯一の希望、人間が生きる道、赦しというものです。ですから、Ⅱサムエル14：14の後半、日本語の訳と他の訳とは少し違いますが、人間はこぼして水を集めることができず不可能ですが、神様にはいのちを与えることができるという話がそこには記されています。神様はこの世のすべての法律、原則、ルールなどを裏切り、罪人である人間を赦すことにされました。なぜかと言いますと、神様は人間を愛していらっしゃるからです。その愛のゆえに方法は、赦すこと以外にはありません。人がどのような存在なのかが分かっていれば、その人間を愛している神様が人間にいのちを与えようとしていらっしゃるから、方法は赦すこと以外にはありませんでした。ですから、この世に存在する法則、人間が作りだしたすべてのルールは、この社会を維持するためにある程度必要なものに間違いありませんけれども、そのすべての法則を裏切ることにしました。それには赦しというものは当てはまらないわけですから。そして、神様は人間を赦すことを選ばれたわけです。その赦しの方法は、罪のない御子イエス・キリストを犠牲のいけにえ、あがないのいけにえとして捧げることでした。これが赦しの条件、赦しの方法なのです。これが愛の現わしなのです。ローマ3：25-26を読みます。「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです」。このような方法を通して、御子イエス・キリストを犠牲にすることによって、神様は人間を赦されることにしました。

　改めて申し上げます。なぜそこまでされるのでしょうか。それ以外には方法がないので。なぜその道を選ばれたのでしょうか。罪人である人間を私たちの頭では千年経っても理解できませんが、そのような罪人を愛していらっしゃったので、その愛のゆえに方法は赦すこと以外にはありません。人間に少しでも可能性があると思う限り、この神の赦しに対しては理解できません。これが神様の愛なのです。ですから、ローマ5：8には「私たちがまだ罪人であったとき」に、イエス・キリストが十字架に犠牲になられることによって、私たちに対する神様ご自身の愛を明らかにしておられれると記されています。これが神様の赦しであり、人間の唯一の希望である赦しが見られるところです。他のところではこの赦しなどはありえません。キリスト・イエスの中から見られるものであり、神様にのみ見られるものです。結局、私たちの側から見たときには無条件の赦しになるわけです。私たちにはこれっぽちも神様の愛に値するようなものを持ち合わせていません。滅びる罪しかありません。何もできません。赦されること以外には希望はありません。神様が一方的にキリスト・イエスを犠牲にして私たちにこの唯一の希望である赦しの祝福を与えられました。その結果、私たちの方からは無条件の赦しになるわけです。それを福音と言います。人間のどのような条件も関係ありません。なので赦すということは、相手が決まり、ルール、法律を守ることができないということが分かったときに生まれるものなのです。そして、その無能な相手を愛しているがゆえに生まれるものを赦しと言います。私たちはこのような神様の不思議な赦しによって今ここに立っている者です。神様の赦し以外に生きる道などは人間に存在しません。ダビデは自分が犯してしまった罪を通して、神様のこのような赦しを体験した者なのです。しかし、実際、自分の息子が同じ罪を犯してしまったときに、その問題の前でこれが適用されることを躊躇していました。そこに神様は、ヨアブを通して、また女の人が芝居を打つことによってダビデに改めるように悟りを与えられたということです。そこでダビデは悟って、アブシャロムを戻すことを許可するようになります。

　今日の聖書のお話を通して、私たち人間に法律も様々なルールももちろん必要なものですが、それ以前に人間には愛が求められるものであるし、人間に必要なのは神様の赦しであるということを明確にしていかないといけません。それから、本当にまことの神様の赦しをいただいている者は、他人を赦すことができます。神様のまことの赦しを受けたということは、自分は神様の赦しのほかには希望がない、神様の赦しが必要だということに目覚めているという意味でしょう。そういう人間が他の人を赦すことができます。そして、相手を赦すという行為は、実は自分を赦すことなのです。人を赦すということは、道徳的な行為ではなく、また心が広いから、性格的にそういう性格を持っているから行うものではありません。赦しというものは、赦すこと以外には道がないということを分かったときに生まれるものなのです。その他に道がない。だから、過ちを犯して、犯罪を犯して、失敗を犯している人間を見て、私もあなたと同様に赦しが必要な人間だよということを正直に告白してへりくだること、それを赦すと言います。上からの目線で人を赦すわけではありません。2部礼拝でも申し上げますが、クリスチャン同士、また未信者に対しても同じです。私たちが正解、答えを持っていることは間違いありませんが、そうじゃない人に対して上からの目線でお話をするということは言語道断なのです。私もあなたと同じ罪人で、赦しが必要なもので、その赦しを一方的にいただいている者であるがゆえに、あなたにそれをおあかししていくだけなのだよということです。クリスチャンの私たちは神様の前で何かを要求する以前に、何かを主張する以前に、何かの権利を訴える以前に、赦しを求めていかないといけません。私たちはそういう存在なのです。そして、その姿勢で神の前に出て、キリスト・イエスの中にある無条件の赦し、それをいただいていることを確認して、その赦しを体験して、それを感謝する、そうすると人は謙虚になります。恵まれたので、肩で風を切るようになるものではなくて、恵まれれば恵まれるほど、人はへりくだって謙虚になります。正しい信仰であれば。もちろん性格上、霊的な様々な問題がまだ整理されていないがゆえに、その恵みが変な形に現れる時刻表はあります。それもしっかり理解していかないといけません。けれども正解は、本当に神の赦しが必要な罪人であることが分かって、その一方的な無条件のキリストの犠牲による赦しをいただいている者であればへりくだるようになるしかありません。人を見るときに赦しの目で見るようになるしかないのではないでしょうか。

　今日のまことの赦しを正しく理解して、常に自分自身を赦して、そして、その赦しを他人に適用していく、そのようなクリスチャンになることを祈りたいと思います。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。ありがとうございます。私たちは罪人です。根本的に自ら善を行うことができない、神の律法を一ミリたりとも守ることができない不可能な存在であることを認めます。キリスト・イエスの十字架の犠牲による神様の無条件の赦しのほかに私が生きる道はありません。この赦しを自分のものとして確認して、そして、私たちの周り、特に兄弟姉妹の弱さや失敗や、特に罪を犯した場合に忍耐をもって、愛をもって、赦しの他に道がないことを理解して、その赦しを謙虚に適用していくことができるようにひとりひとりを祝福してください。そして、この赦しの祝福が日本47都道府県、237カ国、世界中に広まっていくように私たちを用いてください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。